

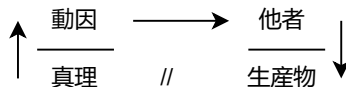
図8：神経症の主体における四つのディスクール

*N
(結節点1)

*1
神経症的な欲望の主体が対象aを
「(象徴的父により解決可能な) 問題」
とするとき、
*M
(図7) → 主体はその問題に対して
「(自身がそれになることはない) 根拠」と
「(自身の手に入るものではない) 結論」が
存在すると信じている。

*2
このように解釈をするとき、
・ a:
対象a、転じて、予測誤差としての不確実性、
加えて、そこにファルスが与えられるべきとされるもの
・ \$:
欲望の主体。対象aの解消を試みてシニフィアンを操作する
・ S1:
象徴的父、転じて、
シニフィアンを連鎖させて構築する「言説」の根拠であり、
根拠の選択の仕方により規定される
「問いの枠組み (プロブレマティク)」
・ S2:
父がもたらす法、転じて、言説の結論であり、
問いの枠組みにおいて根拠に従属する諸命題
の四つの要素を用いて、
神経症者の思考や行動を表現する
右記の「四つのディスクール」を描くことができる。

*3
四つのディススクールを構成する
各位置には、
右のような役割がある。
・ 主体が当初
同一化しているものが
真理である
・ 真理には十全でないところがあり、
それが動因を発生させる
・ 動因は他者に働きかけ、他者は生産物を算出する
・ 生産物は真理を十全にすべく生じたものだが、
それは実現しない



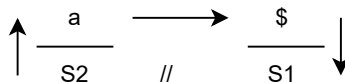
*4

分離が始まる瞬間
(=エディプス第二の時) に
対応するのが、

右の「分析家のディスクール」である。

- ・主体は既存のシニフィアンの体系 (=S2) に
同一化している
- ・シニフィアンの体系には非一貫性があり、
予測誤差が対象aを生む
- ・対象aは主体 (=S) を作動させ、
主体は革新的な視点 (=S1) を得る
- ・新たな視点は既存のシニフィアンの体系と調和せず (=S2//S1) 、
シニフィアンの体系を組みかえはじめる

このディスクールは不安定であり、
速やかに下記の「主人のディスクール」へと移行する。

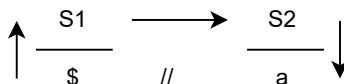


*5

父性隠喩を確立する段階
(=「エディプス第三の時」) に
対応するのが、

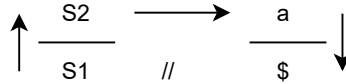
右の主人のディスクールである。

- ・主体 (=S) は新たな根拠となるシニフィアン (=S1) を生み出す
- ・新たな根拠に基づいて様々な命題が生み出されていく (=S1→S2)
- ・しかし、そうして構築された新たなシニフィアンの体系にも
非一貫性 (=a) がある
- ・この非一貫性は、このディスクールで最初に欲望の主体が
解消しようとしたものとは異なる新たな対象aである
- ・生み出された対象aと主体との間には断絶があるが (=S//a) 、
主体はこの断絶が克服されうものなのだという
幻想を信じる (=S◇a)



*6

確立した父性隠喩について、
現実的父に同一化し
象徴的ファルスを持っていると
思いたい者は

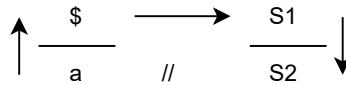


右の「大学人のディスクール」を好むようになる。

- ・主体(=\$)は言説の根拠(=S1)を所持する者に同一化している
- ・言説の根拠はそれ単独ではシニフィアンを形成できず、自身に基づいた様々な命題を持っている(=S2/S1)
- ・様々な命題は、新たな対象aを既存の問いの枠組みを保持したまま解決しようとする(=S2→a)
- ・だが、その試みは不徹底に終わり、新たな欲望の主体(=\$)を発生させる
- ・しかし、新たな欲望の主体に従って再びシニフィアンを組み合わせることは、現在の主体の同一化を放棄させることを意味するので、この新たな欲望の主体は抑圧される。

*7

確立した父性隠喩について、
象徴的ファルスに同一化し
現実的父に欲望されることを
欲望する者は



右の「ヒステリー者のディスクール」を好むようになる。

- ・主体は、対象aの位置に来るべき象徴的ファルスに同一化するために、ファルスに仮装する(= \$/a)
- ・仮装した主体は自身では対象aを解消できない
- ・仮装した主体は対象aを解消すべく、現実的父になりえそうな他者に働きかけて(= \$→S1)様々な命題を吐き出させる(= \$→S1/S2)
- ・しかし、いかなる命題も対象aそのものを根絶することはない(= a/S2)
- ・そのため、それらの命題の根拠(=S1)も失墜する